

栗本薫

魔界水滸伝1



KADOKAWA NOVELS

時空を超えて蘇る魔界の使者。
今はじまる凄絶な妖怪大戦争。
絢爛たる伝奇SF巨編第1弾!



カドカワ パルズ

昭和五十六年十一月一日初版発行
昭和六十二年七月十日二十四版発行

著者 栗本薫
くりもと かおる

発行者 角川春樹

まかいすいこでん
魔界水滸伝 1

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大谷製本

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三十三 振替東京三一九三〇八

〒103 電話 営業〇三三八八五三 編集〇三三八八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-770901-8 C0293

栗本薫

魔界水滸伝1



KADOKAWA NOVELS

時空を超えて蘇る魔界の使者。
今はじまる凄絶な妖怪大戦争。
絢爛たる伝奇SF巨編第1弾!

KADOKAWA NOVELS

●作者のこぼ

私はいつも《異常なもの》《常ならぬもの》にひかれる。

幽霊、妖怪、超自然現象、ありえざりし歴史——それは前から、
私がいづも書きたいと思っていたものだった。それも人間の敵対物としてでなく、
むしろかれら自身を主人公としての物語を。
妖怪たちはこの世界をどんなところと感じ、見ているだろう。

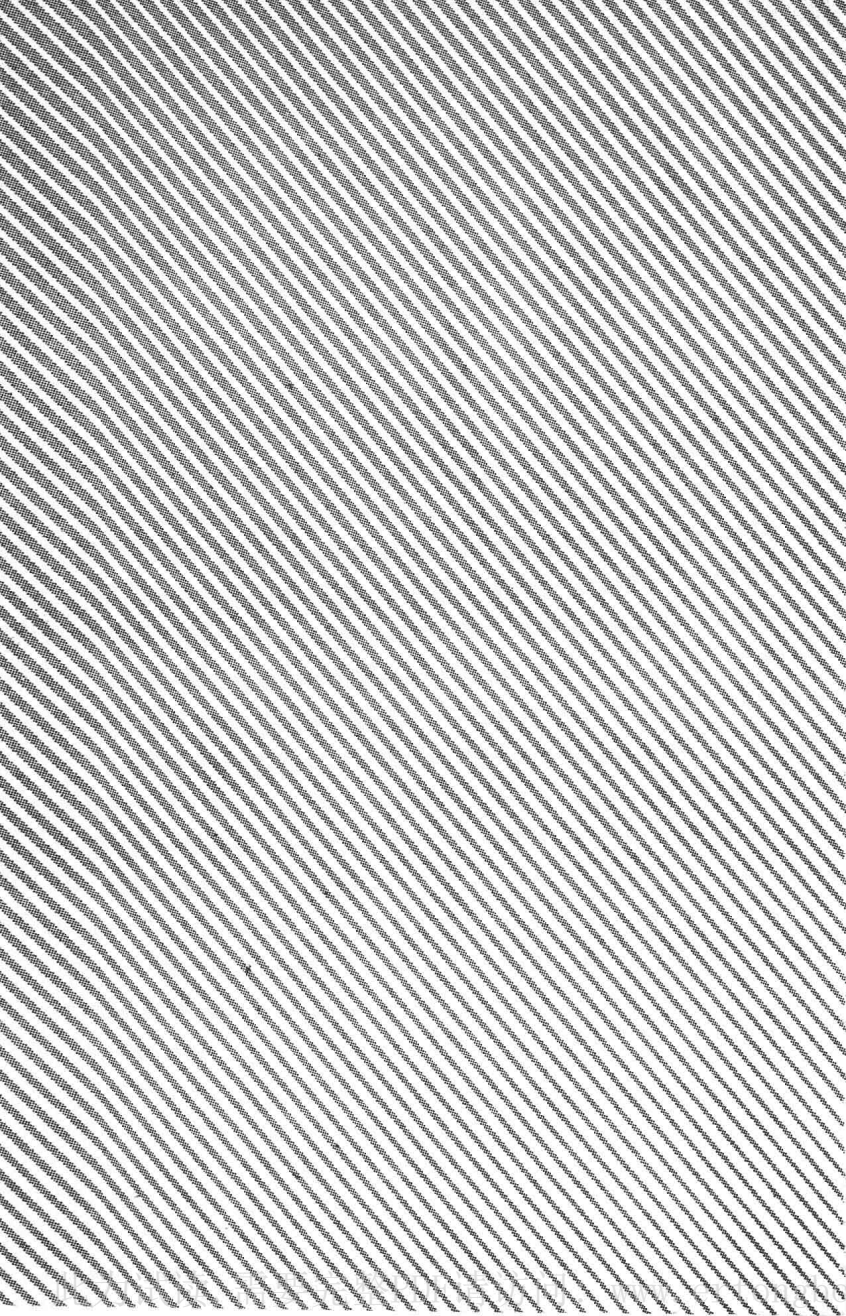
それがこの物語を書こうと思った理由である。

略歴——一九五三年東京生。早大卒。第24回江戸川乱歩賞受賞後、推理・SF他多方面で活躍。



本体(CD000E)

770901-8 C0293 P700E



KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝 1

栗本薫

カバー絵・本文イラスト／永井豪

魔界水滸伝 1

目次

プロローグ	1
プロローグ	2
プロローグ	3
プロローグ	4
第一章 呼び声	1
呼び声	2
呼び声	3
	79
	56
	35
	26
	20
	14
	11

第二章 徴 ^{きし}	1	100
徴	2	122
徴	3	134
第三章 襲来	1	144
襲来	2	155
襲来	3	165
襲来	4	176

第四章	魔性	1	188
	魔性	2	199
	魔性	3	208
	魔性	4	217

プロローグ 1

溶けてゆく……

悲鳴がのどにつまり、心臓に逆流する。

溶ける——からだがどろどろと溶けてゆくとする。

(ああ……)

何とか、声を立ててかれは叫ぼうとする。叫ぶこと
さえてきたなら、何ほどかは楽になるにちがいないの
だ。

(ああ——溶ける……溶けてしまう)

(誰か、助けて——からだが……)

涙と汗が顔をぐしゃぐしゃにする——が、それすら
も、もう、とけつづけ、火にさらされた氷のようにと
ろろとなつてゆくからだの表皮と入りまじり、見わ
けもつかない。

無性に恐しく、苦しく、そして、自分が誰だったの
か、何もので、何という名で、いや、そもそも、いつ

たいどういう生物であつたのか——それさえもが、さ
だかではなくなつてゆく。

からだがダラダラととけくずれて流れ出し限りなく
のろろと世界——地球の上をおおいつくしにかかっ
ているような、おぼろげな感覚があつた。

ひどく、汚^がれ、いやらしく、そしてうとましい生命
と化してしまつたかのような不安と恐怖——自分のそ
のとけくずれたおぞましい肉を、おのが手でひきちぎ
り、燃やしつくしてきよめてしまいたい、とでもいう
ような、異常な嫌^{ウミ}悪。

かれの中で何かが分裂し、争っている……一方は、
何か、古く、よんだ、すえたような、《悪》という
にさえあまりにも底知れぬもの。そしてもう一方は——

もう一方は……

かれは金切り声をあげた——

つもりだった。

声は少しも出てさえいなかった。

ただ、言おうような息苦しさ、まっくらなか
たまりになつてのどにつまり——それは、さながら、

考へてはならぬことをかれがつい考へようとした、そのことへの罰でもあるかのように……

(ああ。——溶ける。溶けてしまふ)

最初の、太古の暗黒。いまだ、何もかもがさだかに生まれ出てさえもおらず、すべてがぬめぬめと、泥濘（どろみ）と暗闇（くらやみ）の中でうごめき、むしばみあい、ほのめいていたころの——太古の混沌（こんとん）。

かれが、かえってゆこうとしているのは、はたしてそれだったのだろうか。

それとも……

(ああ……)

何もかも、もはやことばにならない。もがこうとしても、もはや腕も脚もなく、顔さえも失われ、ただ、意識の眼だけが、どろどろとうごめくその奇妙な、原始的な生命体を上から見おろすようにして半ば醒め、半ばその闇へひきこまれようとしながら弱々しくおののいている。

ねつとりと混沌はあたりをみたし、空気さえも、その生ある泥濘のうちに取りこまれてゆこうとする。じわじわと、それは繁殖しつづけ、おのが血肉をくら

あつて、ただうごめき、のたうちながら、ざわざわ、ざわざわとひろがつてゆく。

(ううう……)

かれの中で、しだいに絶叫（せつごう）が堪えようもなくふくれあがつてゆきつつある。どうしようもない、嫌悪と恐怖、かれの中に、わずかにのこっている人間性が、救いを求めて、さいごのあがきをころみようとする、悲痛な、はりさけんばかりの絶叫。

(いやだ——溶けるのはいやだ。あんな——あんな生物として生きるのはいやだ。おれは人間だ。人間なんだ。人間だ……)

(イヤダ、イヤダ、イヤダ、イヤダ——)

いまにも、もう、はじめてしまふそうだ——のどにかたくつめられた禁忌の栓を、ありたけの力ではねとばし、のどもさけよとばかりにほとばしろうとする。

(ああああああ……あ——！)

ついに、それがやって来る。

ふいに目もまわるようなすさまじさで、泥どもが、汚らしい生ある泥が、ざわざわとのたうちはじめ。何かから、必死に逃げよう、少しでも遠ざかろうとす

るかのように——ひき潮のようにひいてゆこうと狂気のようになる。

いつのまにか、かれはそのいやらしい生物の内にすっかり混りこみ、おびえ、狂乱して、どうしてかはわからないのにただ無性におそろしい、何かから少しでも遠くへ逃げようとして、仲間の泥の上にかさなり、ずぼりとめりこみ、ぬめぬめとあがきながら、狂おしい惑乱をふりまいていた。

溶ける……

それは、からだがとけて、この泥のなかにくずれこんでゆく、さっきまでのあのおぞましい恐怖とは明瞭にちがっていた。そうではなく、こんどの溶けることへのおびえは、それに万一つりつかれれば、もはや二度とその汚らしい泥の生命をさえ得ることのできぬ、さいごの消滅への、まったくの無にかえてしまうことへの、どうしようもない、とどめることのできぬはじめな恐怖だった。

かれら——そのあわれな原始的な生命たちは、音たてて、一方へと逃げまどうていた。《破滅》はその反対側の方向からやってくるということが、何となしに

その巨大なアメーバたちには感知されていたのだ。声にならぬ恐怖、ざわりざわりと、なかばとけあい、なかば分裂しているゼリー状の肉質が、うごめきあいのたうって立てるいやらしいざわめき。

原初よりずっとそのままであつたはずのその巨大な暗黒のなかに、いまやついに、破滅の夜明けが訪れようとするのだ。

そして——それは来た。

おお……

かれはふりかえり、見——そして、声にならぬ絶叫をふりしぼった。

いま、ゆっくり——限りなくゆっくりと上ってくる太陽……真闇の地平を切りさいて、何よりもおそろしい白熱した光を世界にもたらしつつ……

それは、一個の、おそろしく巨大な眼球だった。なまなましい虹彩の菊花のような模様、水晶体のぶきみな半透明の色あいまでもが、はつきりと見てとれた。

「うわあああああ——」

ついに、かれののどをつなぎとめていたせきは、切つて放たれた。

かれは、すさまじい絶叫をいつまでもいつまでもほとばしらせながら、くずれおちてゆく世界もろともおのれのさいごの意識が灼きつくされてゆくのおぼろげに感じていた…………

プロローグ 2

「――夏姫なつめ！ 起きて、姫めい！」

激しく誰かの手が、からだをゆさぶっていた。

ようやく、彼女の眼がひらいた。が、それと、

「キヤーッー」

すさまじい悲鳴を彼女がほとばしらせるのが同時だった。彼女ははね起きて、ぶるぶる震えながら、毛布を胸におしあてた。

「あ…………」

「姫！ どうしたのよ。あたしよ、わかんないの？」

「あ…………」

ようやく、夏姫の目の焦点があつた。

「あ――まり？」

「まりじゃないわよ。ルーム・メイトの顔もわかんないの？」

麻生あそうまり子は気をわるくしたようすで、夏姫の肩に

手をやった。が、すぐにはなして、びっくりしたように叫んだ。

「姫—— あんた、すごい汗……」

夏姫は、自分のひたいや、からだじゅうが、べっとりとぬれているのに気づいた。それは、冷や汗というよりは、あぶら汗そのものだった。

「よっぽどこわい夢見たのね」

まり子は、やっと氣をとり直したようだ。

「すごいなされようだったわよ。あたしまで、こわくなっちゃった——なんか、だんだんひどくなるんじゃない？」

「ごめん。本当、ごめん、まり……」

「しょうがないわよ、夢は本人の責任じゃないもん。けど、こう毎晩だとさあ、からださが——あたしだけじゃなくて、あんたのからだがね……」

「ごめん、本当に——いま何時？」

「三時」

いつもと同じだ——夏姫はぞくりと身をふるわせた。夢の恐怖はすでにあとかたもなかったが、それよりも、

この恐怖の方が、妙になまなましく身内にセマった。

この数日決まったように、眠りにつくと、ひどい悪夢にうなされる。それはいいとしても、それが、毎晩毎晩、びったりと時間どおりに午前三時だ、というのは——それはいい、理屈で説明のつくことなのだろうか？

「明日、早いんでしょ。ごめんね、まり——もう大丈夫だからね」

夏姫は立って、タオルをとってきてからだをぬぐいながら言った。

「もう、寝て」

「ん……」

まり子は生返事をした。

スタンドをけそうと手をのびしかけたが、ふいに氣をかえて、枕もとからタバコの箱をとった。

一本くわえ、カチツとうす闇に小さな赤い火をうかせて、

「ねえ、姫」

思いきったように言い出す。

「ちよっと——話ししない？」